







場所は、道東の酪農の町 中標津町

オーナー自身が酪農家であり、産業としてのみならず  
広く“牛”を知って貰える  
中標津という場所に根差した【交流の場】を作りたいという想いから  
誕生したゲストハウス

空間の特徴として  
オーナーの牧場や牛舎、道具、それらの素材などからヒントを得て  
牧歌的で素朴な木材を多用しつつも  
新たな地域の場所としてクリーンでフレキシブルな空間を目指した

木材と対比する白い壁や床は、セメント系のパネルや塗装で“ミルク”をイメージ

ハイカウンターを備えたキッチン空間は 牛舎の構造体をモチーフとした形状とし  
フレームで領域を作り出した

宿泊室、特にドミトリーと呼ぶ多人数での宿泊室については  
空間的制限により多段ベッドを配置しているが、  
スチール製のフレームに木製積層パネルで床と壁を構成している

フレームの素材には、意匠も兼ねて牛舎内部の構造体であるスチールを用いて、  
牛たちの寝床を この宿での宿泊スペースとして置換し 旅人たちの寝床として再構築した

